

目 次

■第40回「青森県少年の主張大会」概要	P 2
■主催者挨拶	P 3
■来賓祝辞	P 4
■発表	P 5 ~ P 12
■講評	P 13
■第40回「青森県少年の主張大会」実施要綱	P 14
■講演	P 15 ~ P 16
■紹介 第40回少年の主張全国大会～わたしの主張2018～	P 17 ~ P 21
●内閣総理大臣賞受賞	
●文部科学大臣賞受賞	
●国立青少年教育振興機構理事長賞	
●審査委員会委員長賞	
第40回少年の主張全国大会開催要綱	P 22

第40回「青森県少年の主張大会」概要

■次 第

1 開 会

主催者挨拶 青少年育成青森県民会議会長 橋本 都

来賓祝辞 六戸町長 吉田 豊

2 発 表

人をつなぐ架け橋に	六戸町立六戸中学校	3年	苫米地 大
言葉は人をつくる	八戸市立第一中学校	3年	梅内 智穂子
認め合う心	階上町立道仏中学校	3年	大野 彩夏
ひょっとして私も・・・	八戸市立白銀南中学校	3年	兼平 菜穂
直接言いたい！	青森市立南中学校	3年	木村 芽生
大樹に抱かれて	青森市立荒川中学校	3年	櫻田 純菜
もっと知りたいパラスポーツ	弘前市立船沢中学校	3年	對馬 諒
ありがとう	六戸町立七百中学校	3年	長根 優依

3 講 演

「若者よ“ご縁”をつかめ！」

講師 フリーリポーター 中島 美華 氏

4 表 彰

最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞5名

5 講 評

青少年育成青森県民会議 青少年専門指導員 三上 真広

6 閉 会

■審査員

青森県PTA連合会	副会長	三上 宗一郎
青森県青少年・男女共同参画課	課長	松岡 浩美
青森県教育庁学校教育課	指導主事	工藤 慶憲
青少年育成青森県民会議	青少年専門指導員	中澤 道男
青少年育成青森県民会議	青少年専門指導員	三上 真広

主催者挨拶



青少年育成青森県民会議
会長 橋本 都

皆さん、こんにちは。

「第40回青森県少年の主張大会」の開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、六戸町町長 吉田豊様はじめご来賓の皆様には、大変お忙しい中、本大会にご臨席をいただきまして、誠にありがとうございます。

また、本日ご来場の皆様には、台風や地震などさまざまなことがあり、そして今日は大雨という大変な中を御参加いただきまして、ありがとうございます。

この大会は、昭和54年の「国際児童年」を記念し開催されてきたもので、これまで数多くの中学生や大人が参加し、中学生の皆さんからたくさんのことを学んできた大会であり、毎年順繰りに県内各所で開催されております。

国連の児童に関する宣言では「人類は児童に対し、最善のものを与える義務を負う」というふうになっておりますが、世界中で、貧困、武力衝突、虐待など、子どもを巻き込むさまざまな大きな問題が発生しています。日本でも、物があふれ豊かといわれているのに「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が制定されました。また、科学技術が進展し、AI人工知能の開発が進んだ一方、ますます気象異常が続き、いじめのニュースにも心痛む毎日です。さらに、地方の人口減少は急速に進んでいます。

このような中、本県民会議では「育てよう 未来をみつめる かがやく瞳」のキャッチフレーズの下、青少年育成県民運動を展開していますが、子どもたちが夢や希望をもって生きていくことができるようになるためには何が大切なのか、これからの社会を担う中学生の皆さんにも、是非考えていただけたらと思います。

本日は、選ばれた8人の皆さんが、様々なテーマで発表することとなっています。中学生の皆さんがどんなことを考え、どんな意見を聴かせてくれるのだろうと大変楽しみにしています。

また、大会に参加の六戸中学校と七百中学校の皆さんにも、発表を聞きながら「自分とは違う考えがある」「自分ならこういうふうに行動する」というふうに、いろいろ考え行動する機会にいただければと思います。他の人の話を理解し真剣に考え発言することはとても大切です。

さらに、本日は意見発表の後、いつも笑顔のフリーリポーターの中島美華さんに「若者よ“ご縁”をつかめ！」と題したご講演をいただくこととしています。

中学生は、小学生時代とは違い、学習内容や活動範囲が広がり、広く地域のことについて学んでいることと思います。スポーツや課外活動に打ち込んでいる人もいるでしょう。中学校の3年間は、多様な人々の関わり、つながりの中で自分を形づくり、心身ともに大きく成長する人生の中でもかけがえのない時期です。この大会が、参加されたすべての皆さんにとって希望につながることを期待しています。

最後になりますが、大会参加をお引き受けくださいました校長先生はじめ教職員の皆様、開催に当たりご協力いただきました六戸町教育委員会教育長はじめ関係者の皆様に、心より感謝申し上げます、あいさつの言葉といたします。本日はよろしく願いいたします。

来賓祝辞



六戸町 吉田 豊 町長

第40回という記念すべき青森県少年の主張大会を
当町で開催していただき、県内各地からお出でいただきましたことを、
心からご歓迎申し上げますとともに、大変嬉しく思います。

皆さんの頑張りを期待いたします。

次代を担う子供たちを健やかに育てていくことが私たちの願いであるとともに、大人である私たち一人ひとりが担っている義務でもあると思います。しかし、現実には、核家族の増加や地域社会におけるコミュニティが薄れつつあると同時に、これが個々に対して孤独感や疎外感をもたらし、青少年の非社会的行動に繋がっていくことが顕著となっております。

私たちもそうであったように、中学生は、大きな夢や希望を持ち、様々な事に対し考え感じ取り、大人達が思いつかないような発想や創造性を持っています。個々の能力や発想力が必要とされる現代社会において、その自らの考えを主張することは大変重要なことであり、また、大人達は生徒達の成長を実感し、その主張に耳を傾け関心を持ち理解を深めていかなければならないと考えております。

皆様のようにこれからの時代を築いていく若者が、どんな考えを持ってどのような主張をするのか、大変興味があり、私ども六戸町の町議会議員の皆様も「若者の主張を聞きたい」ということで、お越しいただいております。

意見発表の後に行われる講演会では、中島美華さんが「ご縁」というタイトルで話をされるということですが、年代を越えて若者の声を、そして若者のみならず年代も男女の区別もなくその声を聞き、みんなそれぞれの立場を理解し、互いに意見を出し合いながら社会を築いていくことが大切であると思っております。

また、六戸町民歌を歌っているのは中島美華さんであり、六戸に大変縁のある良い人が来てくださいました。生徒の皆さんには、中島さんの話もしっかり聞いて、明るく元気に過ごしてもらいたいと思います。

本日、発表される皆さんには、この晴れの舞台、同世代の方々や大人の方々に、自分自身を大いにアピールしていただき、みんなで考える良い機会となりますこと、そして、これからの明るい未来へ繋がっていく実りある大会であることを心からご期待申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

最優秀賞

ありがとう



六戸町立七百中学校 3年 長根 優依

思い浮かぶのは、母の優しい、大きな手。安心できる背中。そして、何も言わずに黙った母の、悲しい悲しい顔。私は母のことが大好きでした。一緒に笑ったり喜んだりする日常が当たり前だと思っていました。でも、小学四年生の夏休み、それは当たり前ではなくなりました。

「優依。しっかり聞いてね。お母さん、がんなんだって。治らないんだって。今年中に死ぬかもしれない。」夏だというのに寒気がしました。姉の暗い顔、しっかりとした声。体は言うことを聞かず、動いてくれませんか。どうして。

いつから。

本当に。

なんでお母さんなの。

お母さんはこの世からいなくなるの。

無数の疑問のすべてを口に出してしまいました。姉は、全てに丁寧に答えてくれました。真剣な顔で、じっと涙をこらえて。嘘じゃないんだ。信じたくないけど、それは必ずやってくる現実なのだと、思い知らされました。

許可をもらって、病室で寝泊まりしながら、母の看病をしました。

体につけられている管の数はどんどん多くなり、髪は抜け落ちていきました。日に日に痩せていく母の姿に、胸が苦しくなりました。

よくしゃべり、よく笑う母が、イライラとした気持ちを表に出すようになり、だんだん怒りっぽくなりました。

今思えば、母は残された時間で、私に、多くのことを伝えたかったんだということ、そして、それを伝えられない悔しさでいっぱいだったのだということがわかります。でも、その時の私はそんな母の気持ちを分からずに、言うてはいけない言葉を。伝えてしまったのです。

「もう、お母さんなんて死んじゃえばいいんだ!」

何も言わず、怒ることもなく、ただただ驚き、悲しむ、母の顔。

本当はそんなこと思っていないのに。

次の日、いつものように母を起こそうとしました。でも、母は呼びかけに応じてくれませんでした。怒っているのかな。話したくないのかな、そう思いましたが、姉が呼びかけても、結果は同じでした。

母は、神様のところへ行きました。

「まだ連れて行かないで。」

「お母さん、私を置いていかないで。」

そんな願いが届くことはありませんでした。

これが私の後悔です。

私はこの時決めました。人を傷つける言葉を使わないで生きていくことを。笑顔で生きていくことを。この後悔を抱えて生きていくことを。それが、母が生きていた証であり、母と生きていくことだと思います。

心に後悔を抱えて生きることが、必ずしも後ろ向きなことではありません。私は今、誰かを励ます言葉をいうことができます。明るい顔で、前向きな気持ちで生活することができます。それは、仲間や家族のおかげであり、母のおかげです。これからも私は、心の中の母と一緒に笑えるように生きていきます。

お母さん、ありがとう。

優秀賞

言葉は人をつくる



八戸市立第一中学校 3年 梅内 智穂子

「もう、今日の宿題多すぎる。まじ最悪。」「今日、一時間目からテストがある。もう最悪。諦めようかな。」
みなさんは、このような会話を聞いたことはありませんか。きっと、多くの人は「ある」と答えるでしょう。私の周りでは、毎日のように耳にする会話です。もしかしたら、自分のことだと思った人もいないのでしょうか。

私は、この会話に出てくる「最悪」という言葉がいつも気になっていました。この言葉を聞かない日はありませんし、どうしても、前向きな気持ちになることはできません。どうして「最悪」と言うのだろうという思いが日に日に募ってきました。そして、我慢ができなくなった私は、とうとう友人に向かって叫んでしまいました。

「どうして『最悪』って言うの？何でも『最悪、最悪』って言うんだから。」

そのとき、面と向かって言われた友人は、何か言いたげな表情をしていました。

「最悪」という言葉は、文字どおり、「最も悪い」ことを意味します。しかし、最も悪いことが一日に何回も起こるはずがありません。本当はちょっといやだとか、自分にとって良くないことだという意味で使っているのだと思います。しかし、言葉を正しく使っていないというだけではなく、その言葉聞いた周りの人を不快にさせる言葉だと私は思ったのです。

そういう私は、どうなのでしょう。自分では、そんな言葉を使っているはずがないと思っていました。

私は、部活動がある日や苦手な教科の授業がある日の朝に、「面倒くさい」と言うことが口癖になっていたのです。自分では気付いていなかったのですが、父に、「いつも『面倒くさい』って言うてるよ。聞いている方は、全然いい気持ちがないし、やる気がなくなってしまうよ。」とはっきり指摘されたのです。

私も、人を不快にする言葉を口にしていたことに気付かされました。この出来事があってから私は、「面倒くさい」という言葉を口にしないことを心に固く誓いました。

私には、中学一年生の頃から毎年続けていることがあります。それは、お年寄りの方々がいる施設でのボランティア体験です。車いすを押したり、一緒にお話をしたり、リハビリや食事のときにお手伝いをしたりしました。体験活動を始める前に、施設の職員の方にやり方や留意することについて教えていただきます。そして、実際にやってみるのですが、なかなか思い通りにいかないこともたくさんありました。それでもお年寄りの方からは、「ありがとう、助かったよ。」「一生懸命やってくれて、嬉しいよ。」とっていただきました。感謝に言葉から、大きな充実感や達成感を得ることができました。

「ありがとう」という言葉には大きな力があります。この言葉を聞くだけで、もっと頑張ろうという前向きな気持ちになるのです。

「言葉は人をつくる。だからこそ、口に出す言葉は良く考えて大切に。」

これは、将棋の羽生善治竜王がテレビ出演した際に話題になった言葉です。

言葉によって、私たちは少なからず影響を受けています。何気ない言葉によって、心に傷を負った人もいますでしょう。その反面、勇気づけられたという経験がある人もいますでしょう。前向きな気持ちにさせる、そういう言葉をこれからも使っていきます。人として成長していくために。

優秀賞

直接言いたい！



青森市立南中学校 3年 木村 芽生

自分の気持ちを伝える手段はたくさんあります。手紙に電話、今はスマートフォンのライン機能もあります。でも私は気持ちを伝えるのに、自分の声で直接相手に伝えたいと思っています。直接相手と向き合うことで、相手の心に言葉がダイレクトに伝わるのではないかと考えているからです。大事なものは「表情」なのです。例えば朝、学校にきて「おはよう」と言ったとします。友達がにっこりして元気よく「おはよう!」と言えば「楽しいことがあったのかな」と思います。逆に、目線が下がっていたり、うつむいていれば「疲れているのかな」「嫌なことがあったのかな」と、表情から相手の気持ちが読み取れます。そこで「良いことあったの?」と言ったり「どうしたの?元気がないよ?」と声をかけることができます。そして友達が「それがね…」と話しはじめる、これでコミュニケーションが成り立つのです。また、表情で自分の気持ちを正しく伝えることもできます。

私はある日、とても悲しいニュースを知りました。それは私と同じ中学生がいじめに苦しみ、未来ある命を断ってしまったというニュースです。その原因は「ラインでのいじめ」でした。

「なぜ相手の気持ちが考えられないのだろう、よくそんなことが書けるな。」

と悔しさと怒りがこみ上げました。たしかにラインは便利です。いつでも手軽にメッセージが届けられるし、グループの皆で会話を楽しむこともできます。では、こんな便利なラインでどうしていじめがおこったのでしょうか。

それは、「相手の顔が見えない」からだと思います。例えば学校で「ばかだね」と友達に言ったとします。笑顔で言えば、それは冗談だと伝わります。厳しい表情で言えば、友達への戒めとして伝わるでしょう。それを見た友達はどんな顔をするのでしょうか?笑顔ならば冗談が通じたのだとわかります。悲しい顔をしたら、どういうつもりで言ったのか説明を加えることができます。しかしラインだったらどうでしょうか。お互いがどんな顔をしているか、さっぱりわかりません。つまり、お互いの気持ちがわからないのです。相手がどのような気持ちで言葉を発したのか、それをどう受け取って良いかわからずエスカレートしていく言葉のやりとり。それが自殺にまで追いこんだ「ラインでのいじめ」の原因だと思います。

あるドキュメンタリー番組で、ラインでの人間関係に悩む中学生が言いました。

「夜中の二時までラインをしている。返信しなければ仲間外れになってしまう。」

液晶画面が人間関係の全て、顔を見ない空虚な言葉のやりとりをコミュニケーションだと思っている人達に。相手の気持ちを想像できるでしょうか。お互いが相互にやり取りをせず言いたいことを一方的に送信するのは、気持ちの共有ではなく、強要ではないでしょうか。そんなことをされてうれしい人は誰もいないでしょう。

だから私は、相手の顔を見て、気持ちを考えながら、本当の自分の思いを伝え、相手の思いを知りたいのです。そう、自分の気持ちは直接言いたい!

優良賞

人をつなぐ架け橋に



六戸町立六戸中学校 3年 苦米地 大

東京2020年、オリンピック・パラリンピック。その時、みなさんはどこで何をしていますか。また、どんな気持ちでその時を迎えているのでしょうか。僕は、来たるべきその日をとても楽しみにしています。スポーツがとても好きだし、何より世界各国の選手たちが集まって様々な協議が行われるということにワクワクしているからです。

僕が調べたインターネットのサイトでは、次のようなことが書かれていました。オリンピック・パラリンピックの大会ボランティアに応募してほしい人とは、「熱意のある人。思いやりの心をもちチームとして活動したい人。競技に関する基本的な知識のある人。ボランティア経験がある人。英語や手話のスキルを活かしたい人。」です。

僕は、これを見て英語力よりも先に、熱意や思いやりという言葉があることに目を奪われると共に、とても嬉しく感じました。それは、次のような経験からです。

僕は英語が好きで、授業を真剣に受けたり、英語検定に挑戦したりと、自分なりに頑張ってきたつもりです。しかし、アメリカのALTの先生の英語はスピードが速く、発音もすばらしく良く、なかなか聞きとることができません。そこで、さらに英語の勉強時間を増やし、自分なりに努力を続けました。すると、次第に英語が耳に入ってくるようになり、少し自信を持つことができました。さらに語学力をつけたいと思い、自分の住んでいる六戸町とおいらせ町が協力して行っている海外派遣事業に応募しました。先生方や親の協力もあって実際にアメリカに行く機会を得ることができ、本気で喜びました。しかし、意気揚々と出かけていったその時も、言葉の壁にぶつかってしまいました。ホストファミリーとの会話がうまく続かない現実に関心が折れそうになり、話しかけることに消極的になってしまったのです。

そんな僕を見て、僕と同じ中学生のホストファミリーであるサムが、サッカーに誘ってくれました。僕はサッカー部に所属していたので、とても嬉しかったです。そして、一緒にサッカーをやっているうちに、不思議と言葉が通じなくても、一緒に楽しい思いを共有することができました。さらに、身振り手振りを使うと何とか相手に伝わることもわかりました。それまで曇っていた空が青く輝いているように感じました。このことをきっかけにホストファミリーとも打ち解け、楽しいホームステイをすることができました。僕は、これらの経験から、「思いやり、共に行動すること、思いの共有、相手に伝えたいという気持ち」がいかに大切かを知りました。そしてこのことは、僕にとって大きな財産になりました。

今の僕は、はっきり言ってまだまだ英語力が足りず、さらに努力が必要です。しかし、熱意・思いやり・チーム力・ボランティア精神は、自分のモチベーションを上げることで持ち続けたり高めたりすることができると思っています。どんな時も決して消極的にならず、自分の意思を強く持ち、前向きで積極的な姿勢を大切にしていくことで、人間は成長できるのではないかと考えています。

2020年、東京オリンピック・パラリンピックで日本にやって来るたくさんの外国人の方々も、きっと楽しみにしているはずですが。しかし、慣れない言葉や文化に戸惑うこともあるでしょう。アメリカに意気揚々と出かけて行った時の僕のように。あのとき、助けてくれたホストファミリーへの感謝の気持ちを忘れずに、今度は僕が恩返しをしたいと思っています。その時のために、さらに英語力を向上させる努力を惜しまないだけでなく、相手のことをおもいやり、積極的に身振り手振りを交えて話しかけていける人間になっていきたいと思っています。言葉や文化が違って、同じ人間なので心はきっと通じ合うはずですが。ボランティアの一人として日本と海外の人をつなぐ架け橋になること。これが今の僕の一番の夢です。

優良賞

認め合う心



階上町立道仏中学校 3年 大野 彩夏

本来、人の個性というものは十人十色、多種多様であるべきだと感じています。違うからと言ってそれを正そうというのは、間違っていると私は思うのです。

私は小学校四年生まで東京にいました。小学校低学年の時のクラス替えで、カナダ人と日本人を両親に持つ男の子と一緒にクラスになりました。基本的にいつも明るく、話しかけたら元気に答えてくれる活発な子でした。しかし、小学校低学年ということもあって、周りの子と少し異なる髪の毛の色を不思議に思ったクラスメイト達に、彼のしぐさや行動をからかわれることが度々ありました。

そのクラスには他にも、生まれつき聴力に障害があり、補聴器をつけている子や東日本大震災後に事情で転校してきた福島の子もいました。その子達は、何とか周りにとけ込むことができていたように感じていましたが、ハーフの男の子だけが、どこことなくクラスの中で目立っていたように思いました。彼のことはクラス替えに前に知っていました。普通に友達同士で話していたときに「隣のクラスにハーフの子がいるんだって。珍しいよね。」というようなやりとりをしていて、正直なところ、その時はあまり関わりたくないと思っていました。

ある日のこと、昼休み中にその子が一人で校庭にいるのも見かけました。私はあまり話したことがなかったし、その子の友人関係もよくわからなかったので、気になりながらも話しかけずに別の友達のところへ向かいました。彼は学年が上がる時に転校してしまいました。カナダに転校していった彼は、学校に手紙をくれて、その手紙には一枚の家族写真が添えられていました。それを見たとき、今さらながらに、彼に話しかければ良かったという思いと、あの時彼の隣を横切った瞬間の後悔が胸に残りました。

思い返してみれば、私は初めて「傍観者」になってしまったような気がしました。その後悔を残したまま、私は四年生の時青森に転校してきました。新しい環境に慣れることに必死で、いつの間にか忘れてしまっていました。

中三になった私は、母の職場にいる中国人の方の話を耳にしました。娘さんは全く日本語がわからない状態のまま、日本の中学校に転校してきたらしいのです。立ちふさがる言葉の壁。伝えたいことも伝えられない。次第に彼女とクラスメイトとの軋轢は深まり、彼女はほどなくして二度目の転校を決断せざるを得なくなりました。

私はその話を聞いた時、「どうしてクラスメイトは、分かってあげる努力をしなかったのだろう。」と思いました。しかし、それは過去の自分に対するブーメランでもあったのです。改めて小学校の後悔が甦ってきました。

幼い頃の私が無意識にとっていた行動こそが、今の私が敬遠しているものだったと悟り、私は愕然としました。それは気づいていなくても多くの人にとってしまいがちな「偏見」という概念だったのです。人々の意識下に巣くうその固定概念は、なかなか払拭できるものではありません。小学校のときに私がそうだったように、学校や地域社会といった集団の中では、周りの目を常に意識してしまうため、正しいと思っていなくても実行に移せないことが多々あると感じています。

偏見は狭小の心に生まれてしまうもの。これからの私は、あの時一度でも傍観者になってしまった後悔を、二度と繰り返さないために、たとえ小さくても、他者を思いやり、受け入れる努力を行動として示していきたいと思います。他者の個性を認める心が、多くの認め合う心の原動力に必ずなり得るものだと信じて。

優良賞

ひょっとして私も・・・



八戸市立白銀南中学校 3年 兼平 菜穂

自己コントロールという言葉をよく耳にするようになりました。これって一体どういう意味なのでしょう。

かなり前ですが、和歌山県新宮市の温泉施設で、19歳の少年二人が浴槽にシャンプーなどを入れて大量の泡を発生させたとして逮捕された、というニュースを聞きました。少年二人は、周りの迷惑も考えずに備え付けのシャンプーを、なんと8本分も浴槽の中に入れたそうです。罪名は、威力業務妨害。おもしろ半分、ストレス発散でしてしまったことが、人生に大きな傷を付ける結果となってしまいました。

また、最近あまり聞かなくなりましたが、バイト先のアイスボックスに入った写真をインターネットに投稿する、いわゆる“バカッター”も、おもしろ半分、ストレス発散という、自己コントロールが効かなくなった例として、よく挙げられています。

自己コントロールって何なのでしょう。

私は、誘惑や衝動に、自分の意思で制御することだと考えます。

私の家には、2歳の甥っ子がいます。とてもかわいくて、いつも家族の中心にいます。

でもそんな甥っ子を、素直にかわいいと思えないことがよくあるのです。

それは、甥っ子の相手をしなければならないために、私の時間が削られてしまうからなのです。例えば、保育園から帰ってきて食事までの間大人は忙しいです。そんなとき、「ちょっと面倒見てちょうだい。」と言われる。この時間帯は、私も学校から帰ってきて宿題をしたいなと思っていても甥っ子の面倒を見なければいけません。そんなときは、「私だって暇じゃない。やることあるのに。」そう思ってしまう。それが何回も続くと、私のイライラは頂点に達し、ある時などは、父や母に、「こっちだってやることいっぱいあるのに、菜穂だって暇じゃないんだよ。」などと言って八つ当たりをしてしまいました。でも、そのときは、父と母が親身になって私の話を聞いてくれて、少しすっきりしました。

私たちは、必ず誰かと一緒に生きています。誰かと一緒にいれば、楽しいこともあるけれど、ストレスがたまることも同じくらいたくさんあります。

そのストレスと上手につき合っていくのが自己コントロールだと私が考えます。

そうは言っても、私たちはまだ中学生です。うまく自己コントロールができる人なんて、そう多くはないでしょう。だから周りの大人に助けてもらうのです。助けてもらいながら、ときどきぶつかりながら、少しずつその力を付けていくのです。でも、それがうまくいかないと、最初にお話した少年たちのように、罪を犯してしまうのではないのでしょうか。

ストレスで家族にぶつかった私でしたが、家族がそれを受け止めてくれたから、今の私があります。でも、それがうまくいかなかったら、私も“非行”という道を走っていたかもしれません。

非行というのは、今まで全く別の世界のことと思っていました。でも、自分を振り返ってみて、それが身近にあることに私は気付くことができました。非行はいつも私の隣にいます。

私たち中学生のストレスは、大人から見ればささいなものかもしれません。けれども私たちにとっては大問題なのです。そのストレスとうまくつき合う“自己コントロール”を高めて、悩みながら大人になっていきたいと私は考えます。

優良賞

大樹に抱かれて



青森市立荒川中学校 3年 櫻田 純菜

私の住む野木地区の入口には大樹がそびえ立っている。このムラの人々からは「野木の五葉松」と呼ばれ、親しまれている。高さ30メートルにも届きそうな大樹で、ムラの象徴たる存在である。数百年の昔から、この地に生き、ムラの人々を見守り、このムラのうれしいことも悲しいことも見つめてきた。そして、私もまた、この樹を仰ぎ見て育った。私は、この樹が好きだ。どっしりと立っている姿を見ると、背すじがすうっと伸びる感じがして、「しっかりやらなければ」と思う。深い緑をたたえた葉が風にふわりと揺れるのを見ると、自分が悩んでいることがひどくちっぽけなことに思えて、なんだか樹が私にほほえみかけてくれているような気がした。樹は何も語りはしないが、私はいつも見守られているような安心感を感じていた。

そんな大樹に異変が起こった。数年前から徐々に茶色の葉が増え、樹の全面の皮がはがれてきたのだ。枯れた大枝はいつおれてもおかしくない状態となり、「枝折れ注意」の看板が設置されるようになった。ムラの人々の中には「痛々しくて見ていられない」と、樹の前を足早に通る人や、「年々元気がなくなるこのムラのこの先を暗示しているようで心が痛む」と言っている人もいた。そう、このムラは、この枯れてゆく老木と同じなのかもしれない。ムラでは以前、青年団という若者たちの集団がムラの行事を主催していた、しかし、その青年たちは今や後期高齢者と呼ばれるようになり、進学や就職でムラを出ていった子供たちは遠くにありてふるさとを思う状況にある。ムラの子供が減り、小学校は廃校となり、運動会の歓声や音楽が聞こえなくなって久しい。先人たちが切り開き、農繁期には笑い声がこだました山あいの田んぼには草木が生い茂り、ヤマザクラが誰に愛でられることもなくひっそりと春を迎えている。このムラが「限界集落」と呼ばれる日も近いのかもしれない。私は、小さい頃から見てきたふるさとがゆっくりと、着実に衰退してゆくを感じていた。まるで、あの大樹のように。私は悲しくて悔しくてたまらなかった。

しかし、その後、ムラの町会長さんたちがこの樹をなんとか生かしたいと、可能性を探った結果、青森県樹木医会にたどり着き、診断をしてもらうことになった。樹木医の人たちは枯れた枝を切り落とし、切り口の防腐処理や土壌改良をしてくれた。さらに周囲の竹やスギを段階的に伐採し、光を当て、環境を整えてくれた。

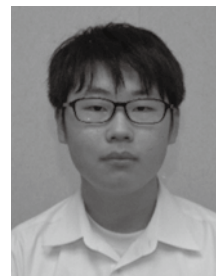
でも、この大樹が生きるか死ぬかは、この大樹次第だと、樹木医の一人は言ったという。「この大樹が生きたいと思う気持ち、今を必死に生きようとするひたむきさがあれば、助かるかもしれない。この樹はまだ生きようとしている。」

私はその言葉を父から聞き、心にずしんと杭を打たれたような気がした。何百年と生きてきた大樹が、この先の未来に向けて、今を必死に生きている。前を向き、少しずつ少しずつ再生しようとしているのだ。私たちもこのムラのことをあきらめてはならない。十年、二十年先も変わらずに、このあたたかなムラとこの大樹と共に生きていきたいと思った。私はこの大樹がますます好きになった。この大樹はムラの人々の心の支えだ。そして、これからもそうあり続けるだろう。

私は、衰えゆくふるさとの中で、自分に何ができるか考える。今の私に答えはないが、これからたくさんのことを学んでいき、少しでも答えに近づきたい。ふるさとを守りたい。その思いを持ち続けて、今を精一杯生きていきたい。大樹から元気をもらいながら。

優良賞

もっと知りたいパラスポーツ



弘前市立船沢中学校 3年 對馬 諒

今年の冬、パラリンピックのスキーを見る機会があった。スキーをすべっている人の前を「G」という字が書かれたゼッケンをつけた選手がすべっていた。スキーの選手は視覚に障がいのある人だった。「G」というのは「ガイド」のことだった。

その時、思い出したのは、僕が二年生の時に学校に来たブラジルの柔道の選手たちのことだ。

「ブラジル柔道の父」と呼ばれる前田光世氏が船沢出身ということで僕たちの学校に来たのだ。選手とコーチ合わせて6名が来校した。

選手たちは目が不自由で、ほとんど周りが見えない人もいるということだった。ここで少しの間、目を瞑ってみてほしい。耳で音は聞こえるが、周りには何があるか、誰がいるかわかるだろうか。恐らくわからないだろう。選手たちのようにスポーツはおろか日常生活も満足に送れない。そんな中で選手たちはメダルをいくつも取っているのだ。

まず選手たちと初めて会って感じたことはその笑顔だった。僕たちの言っていることが通訳の人から伝えられるたびににっこり笑い大きくなずいていた。僕たちが「船沢小唄」を踊っている時は大きな拍手をしてくれた。楽しそうな様子を見てこちらまで楽しい気持ちになった。

選手への質問コーナーもあった。いちばん盛り上がったのは得意技を聞いた時だった、「ハライゴシ」と日本語で答えてくれた。柔道が日本発祥のものということがよくわかった。

視覚障がい者柔道は互いに組み合ってから始める。目が不自由なため場外に近づいても気づかないことがあるので審判が「場外、場外」とコールする。目の見えない、見えにくい人たちに合わせてルールが決められている。僕が見たスキーでは「ガイド」の人がコースの状況やターンのポイントとなる旗門の位置を知らせている。選手はガイドの声と自分の感覚を頼りに斜面を下る。

そのほかにも視覚障がいのある選手たちが出場する競技では、選手を助けるサポーターの参加が認められている。この人たちがいるからこそ、選手は安心して競技に参加できる。

オリンピックはテレビ、ラジオ、新聞などで大々的に取り上げられるがパラリンピックは少し地味な気がする。それが少し残念だ。選手たちが一生懸命にがんばっている姿はもっともっと知られるべきと思う。それと同時に選手を支えているサポーターの存在ももっと知られてもよいのではないだろうか。

障がいのある人もない人も同じようにスポーツを楽しめるような配慮があることを知って驚くとともに、とても良いことだと感じた。これと同じような配慮が世の中には必要なのではないか。そういう配慮があたりまえになる世の中であってほしいと思う。

2020年東京でオリンピックとパラリンピックが開かれる。パラリンピックのルールやサポーターの存在も意識しながら観戦したいと思う。

【講評】

まずは、発表者のみなさん、大変ご苦労様でした。最優秀賞 長根さん。優秀賞 梅内さん、木村さん。優良賞 苫米地さん、大野さん、兼平さん、櫻田さん、對馬さん、受賞おめでとうございます。

様々なテーマでの意見発表でした。人間関係や言葉の大切さ、セルフコントロール、郷土愛、家族愛、共生社会等について、日頃思っていること、考えていること、感じていること、そして体験したことを素直に表現し、聞いている人に感銘を与える内容でした。

論旨、内容、論調、表現力について審査しましたが、各観点の得点がとても良く、レベルの高い発表でした。全体を通して、みなさんの良かったところ、主なもの3つお話しします。

1つ目は、論旨が明確で、文章校正がしっかりしていたこと。2つ目は、感性豊かな意見で、実践意欲が感じられる内容だったこと。3つ目は落ち着いた態度で語りかけるように話し、熱意のある発表だったことです。自分の意見を相手に伝わるように話すには、話す内容と話し方の2つの要素が必要だと言われています。内容を考えるときには、まずはテーマを明確にし、次に段落構成を考えて作文し、最後に推敲することが大切です。また、話すときには、声の大きさ、話すスピード、抑揚、間の取り方、そして感情を込めることが大切です。8名のみなさんは、それらの要素に留意していると感じました。また、中学生らしい視点で、新鮮な意見を堂々と発表する姿に感動しました。

会場に来ている六戸中学校、七百中学校のみなさんは、真剣なまなざしで意見発表を聞き、とても素晴らしいと感じました。審査員や大会関係者からもたくさんのお褒めの言葉がありました。同世代の生徒が、日常生活の中でどのようなことを思い、どのようなことを考えているのかを知る機会になったことと思います。共感できたことを、皆さんのこれからの生活に活かし、広い視野に立って物事を考え、心豊かな人になってほしいと思います。

保護者並びに地域の皆様方、本日は、発表者へ温かい拍手をいただき、誠にありがとうございます。今後も、次代を担う子どもたちの健全育成に御尽力くださいますようお願いいたします。

最後に、発表者への御指導、御支援、大会運営等に御支援、御協力いただいたすべての皆様に感謝を申し上げて、講評といたします。



青少年育成青森県民会議
青少年専門指導員 三上 真広

第40回「青森県少年の主張大会」実施要綱

- 1 趣 旨 中学生が日常生活の中で感じていることや考えていることを発表することにより、次代を担う青少年としての自覚と自主性を育てるとともに、同世代の意識の啓発及び青少年の健全育成に関わる大人の青少年に対する理解と関心を深めることを願い実施する。
- 2 開催日時 平成30年9月10日(月) 13:30～15:30
- 3 主 催 青少年育成青森県民会議・独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 4 後 援 青森県 青森県教育委員会 六戸町教育委員会
青森県中学校長会 青森県私立中学高等学校長協会
青森県PTA連合会
- 5 開催場所 六戸町文化ホール
- 6 実施方法 所定の課題についての主張を県内の中学生から募集し、原稿審査で選考された8名による主張発表を行う。
- 7 内 容 (1) 開会
(2) 主張発表
(3) 審査
(4) 結果発表及び表彰
(5) 閉会
- 8 表 彰 主張発表を行った8名の中から最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞5名を選考し、賞状と記念品を贈る。
- 9 その他 最優秀賞を受賞した者は「少年の主張全国大会」(以下「全国大会」という。)出場候補者として推薦され、審査委員会による審査の結果、北海道・東北ブロック代表(2名)として選考された場合は、全国大会に出場する。

講演

「若者よ“ご縁”をつかめ！」



フリーリポーター 中島 美華

みなさん、こんにちは。中島美華と申します。
今、ご紹介いただきましたように、普段は、ラジオやテレビのリポーターをしたり、イベントの司会をしたり、このようにお声をかけていただければ講演をしたり、歌を歌ったり。開会の際、吉田町長にご紹介いただきましたが、六戸町民歌を歌っております。
ゴミ収集車が来ると流れてるはずなんですけど。ちょっとワンフレーズ。♪ 六戸 六戸 我らが郷土 ♪
聞いたことあった? (会場拍手) ありがとうございます。

いろんな場所に出かけて行って、その場でお願いをしてレポートをさせていただくというお仕事を始めて20年目になりました。フリーランスのリポーターです。

マイクを持って皆さんにインタビューするのがお仕事だったりするので、おかげさまでいろんな方のお話をこれまで20年かけて聞かせていただきました。「その恩返しがしたいなあ」と思うから、このお話をいただいて「はい、喜んで行かせていただきます」ってお返事しました。というのも、実は昨年秋ここで講演をさせていただいて、それを聞いた方が「あの話をぜひ中学生にも聞かせてほしいなあ」と言ってくださったのがきっかけで、今日こうしてお話をするようになったわけです。

少ない持ち時間の中で皆さんにお伝えしたいこと。「若者よ、“ご縁”をつかめ！」このタイトルです。

(生徒数人にインタビュー)

中島さん：「はい、君が感じるご縁を教えてください。
会場(山本君)：「今日のこの機会です」



きたーっ! 今日のお話、その通りです。今日のご縁です。
今日、同じ年頃のみんなが胸に思っていることを聞かせてもらえた“ご縁”。
そして、自分の言葉を直接同じ世代の人たちが聞いてくれる“ご縁”。お互いの“ご縁”。
そうやって考えていくと、世の中ってご縁だらけだと思わない?
自分が生まれたとき、すでに家族と“ご縁”。自分が何かを食べるとき、これを作ってくれた人、この食材を育ててくれた人、その“ご縁”。もう、山ほど“ご縁”なのよ。

今日、みんなに伝えようと思っていること、“ご縁”っていいことばかりじゃないってことなの。
人は、普通、後悔したことというのは、あんまり話したくありません。堂々と「私、後悔した!」と言う人も、あんまりいません。でも、主張大会という機会なので、後悔の話も聞かせてくれました。だから、みんな今日はとても貴重な機会をいただきました。後悔の話も聞かせてもらえたからです。

後悔という言葉、私はあまり使わないの。私は“学び”という言葉に置き換えるようにしています。後悔しなければ学びは少ない。後悔することがいっぱい起こります。みんなは若いから、きっと毎日のように、毎月のように、毎年のように、どんどん後悔が起こります。その後悔を学びに変えて、今回はこれで後悔をしたから、もう同じ後悔はしないんだ。同じようなことが起こったとき、次はこうするんだ。同じような人に会ったとき、次はこうするんだ。それを学びに変えて、次に実行する。そういうことを繰り返していくうちに、年を重ねていって、きっと後悔が少なくなっていくはずですよ。

私は、“後悔”という言葉“学び”に変えて、リポーターというお仕事をしているので、「ぜひ、それを皆さんに伝えられたらなあ」と思って、限られたお時間でおしゃべりにきました。

では、そろそろお時間でございますので、最後に一曲歌わせていただいて、本日の私のおしゃべり、講演終了といたします。

ぜひ、皆さんには、いろんな“ご縁”をつかんでいただきたいです。私の恩師が言いました。「常にアンテナ立てておけ。自分の人生に必要な事、自分の人生に大切な事、自分の人生にとっておもしろいと思う事は、いっぱい来る。その中から、自分でしっかりつかめ。」って。

今日、六戸にいることも、六戸でお会いできることも、私たちが同じ今青森県という故郷に暮らしていることも、私は“ご縁”だと思っています。ぜひ、その“ご縁”気づかずに通り過ぎないで下さい。

では、「この街と」。

この街と

星空が薄れて 朝日を待つばかりの街
いつもとおんなじ 営みの繰り返し
変わることを求めた頃 変わらないことにいらだち
失ったものに気付いた時 残せるものを探し始めた

歳を重ねる毎に 膨らむ この想い

胸を張って言うよ この街が大好き
いい所も悪い所も 全部ぜんぶ
君に伝えたい この街が大好き
春も夏も秋も冬も 全部ぜんぶ

僕らにできることを まだ 手探りだけど

イニシエから続く朝日よ
明日も これからも ずっと
夜から目覚めて 朝を迎える この街を 照らし続けておくれ

胸を張って言うよ この街が大好き
いい所も悪い所も 全部ぜんぶ
君に伝えたい 青森が大好き
春も夏も秋も冬も 全部ぜんぶ
僕らに出来ること 君に つなげること 明日に つなげることを
まだ 手探りだけど



中島 美華／作詞・作曲 ～B-1グランプリ公式ソング

どうもありがとうございました。

第40回 少年の主張全国大会 ～わたしの主張2018～

内閣府総理大臣賞

人生を駆け抜ける

山形県 天童市立第三中学校 3年 岩淵 礼姫

「死にたい」、私はつぶやいた。期待に胸をふくらませていた中学校生活。しかし、そこにまっていたのは卑劣ないじめだった。指をさされ笑われた。トイレのドアをたたかれ罵声をあびせられた。すれ違うたびに馬鹿にされた。毎日苦しかった。悔しかった。もう死ぬしか逃げ場所がなかった。

そんな限界まで追い込まれた私は、ある日の朝爆発した。声が枯れるくらい泣きじゃくり、母に全てを打ち明けた。母は私の話を受け入れ、強く抱きしめてくれた。久しぶりに触れた人のぬくもりに、涙が止まらなかった。

その後、私はたくさんの人に助けられた。いじめをした人に直接注意してくれたクラスメイト、私のことを一番に考え、守ってくれた両親、陰ながら支えてくださった保護者の方々、相談に乗っていただいたり見守ってくれたりした先生方。その人たちのおかげで、「私は独りじゃない、心を閉ざさず自分を表現していいんだ。」ということに気づかされた。そして、私は一歩前に踏み出すことができた。本当に感謝してもしきれない。

いじめを受けていた頃は、人に心を開けず、友達なんか一人もいなかった。でも、三年生になった今では、心を開けるようになり、親友と呼べるまでの大切な友達もできた。自分の存在が疎ましく、毎日通うのが苦痛だった学校も、今では、安心できる居場所となった。学校が楽しくて仕方がない。私は今、とても幸せだ。

いじめの経験は私を成長させてくれた。自分が変わるためには誰かからの助けを待つだけではなく、自ら一歩を踏み出さなければならないこと、自分を偽らず正直に表現すること、そして、一番大切なことは私自身が周りの人を思いやること。私はいじめの経験から大切なことを学ぶことができた。

いじめをする理由は様々あると思う。「社交的じゃない」「容姿がみんなと違う」「一部分がみんなより劣っている」。でも、それは当たり前のことではないのだろうか。

金子みすゞさんの詩に、「みんな違ってみんないい」という言葉がある。それぞれが別々で、でもそれに優劣はなく、すばらしいのだ、という意味である。みんなが同じ顔、同じ容姿、同じ性格では社会は成り立たない。だからこそ、互いを認め合いながら生きていかなければならない。それぞれに個性があるから社会が成り立っているのだ。

私は、いじめを見ている人、いじめをしている人、いじめをされている人、それぞれに伝えたいことがある。まず、いじめを見ている人。今、少しでも助けたいという気持ちがあるなら、勇気を出して、いじめられている人に声をかけてあげてほしい。いじめられている人は「私の味方は誰もいない」という孤独感でいっぱいだと思う。声をかけてあげるだけでも心が楽になるはずだから。そして、決していじめる側の人間にならないでほしい。

次に、いじめをしている人。いじめは立派な犯罪だ。それでも、まだ、あなたは人を傷つけますか。自分のやっていることが人として本当に正しいかどうか、考え直してほしい。あなたのその一言が、あなたのその行動が、相手の命を奪うかもしれないということに気づいてほしい。

最後にいじめをされている人。今苦しくて悔しくて、もうこんな人生捨ててしまいたい、そう思っているかもしれない。私もそうだった。でも、死んで何になる。あなたが死んでしまったら、どれだけたくさんの人が悲しむか考えてほしい。あなたのたった一つの尊い命を捨てないでほしい。

「生きていて良かった」そう思える日が必ずくるから、全力で生きて。逃げていいんだよ。人生は自分の努力次第でどうにでもなるから、今は自分の命を大切にしてほしい。

私も、この経験から学んだことを活かし、たくさんの人に支えられ、助けられた自分のたった一つの命を大切に、自分は自分らしく幸せになるために、しっかりと私の人生を駆け抜けていきます。

文部科学大臣賞

「ダブル」

島根県 隠岐の島町立西郷中学校 1年 高梨 はな

夏休みを数日後に控えた七月十六日、全校一斉での竹島学習がありました。先生の話の聞いたり、動画を見ていたりしたとき、こんな声が聞こえてきました。

「ねえ、これって韓国が間違ってるよね。」

日本の伝えている竹島の歴史が正しいと思う気持ちと、それでも韓国のことを悪く思われたくない気持ち。私の心の中には、日本と韓国どちらとも信じたいという気持ちがあって複雑です。なぜなら、私の父は韓国人。私は日韓のハーフだからです。

日本と韓国は歴史上微妙な問題を抱えていて、常に好感と嫌悪とを繰り返しています。今は「TWICE」や「BTS」などのKポップ人気で韓国に興味をもってくれる人がたくさんいます。「韓国語が話せてうらやましい。」と友達にもよく言われます。でも、このブームはいつまで続くのでしょうか。

私は小学生の頃クラスメートに「お前韓国人だろ。竹島返せよ。」と言われたことがあります。そのときは、やっぱり悲しくて悔しかった。でも友達とは家族の国籍が違うだけで、同じことで泣いたり笑ったりする毎日は変わらない。そう信じられたから、勇気を出して言いました。

「私が韓国人なのが悪いんじゃない。悪いのは認め合えない世の中だと思う。」と。

私が韓国人でもあり日本人でもあることは、生まれたときから決まっていたことです。そして、父の国韓国を大切に思うことは、母の国日本を大切に思うことと同じです。どうしてくらべることが出来るのでしょうか。この気持ちをみんなにもわかってほしかった。あのとき自分の言葉できちんと伝えることができ本当に良かったと思っています。

私は私の経験から、国と国との関係や人の心のつながりをブームにしてはいけないと強く感じています。どんな人とも、どんなことがあっても、わかり合う努力をしたい。それは決して難しいことではないと思います。

例えば、私の家では、家族で話をするとき韓国語と日本語が自然に混じります。

(はな)「今日部活でたたくところ間違えちゃった。」

(母)「えー、そこちゃんと 연습(練習)しないと。」

(父)「대회까지 조금 밖에 안 남았으니까 열심히 해야지.

(コンクールまであと少しだから、よく練習して頑張らないとな。)」

(はな)「알았어. (はい。)」

といった具合です。また、食卓には韓国のりと日本ののりが一緒に並んでいます。

こんなふうにそれぞれの違いをそのまま受け止めて、それでも「すべての人が同じ人間である」と理解することから、わかり合う努力は始まるのではないのでしょうか。外国人だからという理由でしたいことが出来ない。また日本人と同じように見てもらえないと悩む人がいなくなり、誰もが安心してこの国の中で暮らしていける。大好きな日本は、そんな国であってほしいです。

私の心の中には、日本が半分、韓国が半分なのではありません。日本も、韓国もなのです。それぞれの国の良さを、胸を張って伝えたい。私は、「ハーフ」ではなく「ダブル」の生き方を目指したいです。

国立青少年教育振興機構理事長賞

響け! 幸せのメロディー

熊本県 御船町立御船中学校 3年 坂本 優

ふとしたきっかけでボランティア活動に目覚めた私の話を聞いてください。「あーよかったあ。あなたたちの演奏に何度、助けられたことか……。今日の演奏も元気が出たよ。ありがとう。」

平成二十八年四月、熊本を未曾有の大地震が襲い、私のふるさと御船町も大きな被害を受けました。これまで、当たり前だった生活は一変し、「なんでこんなことが起きると? どうして?」と心の中でずっと思うばかりの毎日でした。学校は臨時休校になり、入学したての私は、「なんかせんといかん。でも、なんばしたらいいの?」と悩み、途方にくれる日々が続きました。

そんな時、中学校の吹奏楽部が、体育館に避難されている方々を元気づけようと、ボランティア演奏を行ったという話を耳にしました。「自分たちも被害にあっているのに、他の人のために演奏をするなんてすごい。」と思い、本当に驚きました。これまでボランティアなんてやったこともないし、やろうと思ったこともない私が、「やりたい、やってみたい。」そのとき、ふっと、そう思ったのです。

二回目のボランティア演奏の日、私は、中学校の体育館の中にいました。まばたき一つしなかったような気がします。そして、私自身、胸が高鳴り、興奮しているのを感じました。「よし、学校が始まったら絶対に絶対に吹奏楽部に入ろう。」とまさにそのとき決意したのです。

五月、待ちに待った中学校生活が再開しました。「おねがいします。」私は、すぐに入部届を出し、それから毎日厳しい練習に打ち込みました。月に何度も演奏会に出かけ、入部したての私も、一生懸命演奏しました。会場のお客さんみんなが笑顔になりました。中には、涙を流しながらお礼を言ってくださる方もいて、私も泣きそうになることが何度もありました。

人に喜んでもらえること、人の役に立つということが、こんなにも、心がふるえるほどうれしいことだと思ったことはありませんでした。

これまでの自分自身を振り返ると、自分のことばかり考えていたような気がします。「テストでいい点をとって親からほめられたい。」「勝ちたい、負けたくないから部活動を頑張る。」「目立ちたいからリーダーをする。」など、自分のために、と思ってやってきたことがほとんどでした。

しかし、私は気づいたのです。自分だけの幸せの追求ではなく、誰かに寄り添い、誰かの役に立つことで感じる喜びや達成感は、何にも代え難い人として生きる幸せの追求であるということ。

今私は、吹奏楽部の部長として、地震からの復興のお祭りのステージに立っています。

演奏が始まり、先生のタクトが力強くリズムを刻みます。

響け! 幸せのメロディー。私たちは負けない。

審査委員会委員長賞

自分を好きになる

静岡県 浜松市立佐久間中学校 3年 内山 ほの葉

「もしこの足でなかったのなら……」今まで何度も何度も、そう思ってきた。そして、その度にとっても悔しくなった。自分の意志とは無関係に重い荷物を背負ったようで辛かった。私は、多くの人とは少し違う、曲がった足をもって産まれた。何でよりによって私なんだろう。足さえ悪くなければ。いつもどこかでそんな思いが渦巻いていた。体育でどんでんできる技を増やしていくみんな。マラソン大会で競え合えるみんな。遠ざかっていく背中が羨ましかった。修学旅行などでは、先生方に助けてもらうことも多くあった。感謝する反面、心苦しく感じることもあった。誰かの助けなしでは、皆と同じことができないからだ。また、かわいい靴が履けない。何気ない日常生活の中でさえ、羨ましさの種は、あった。だから、自分の足と運命を恨まずにはいられなかった。毎日の小さな我慢や羨ましが積み重なって自分は周りの人より劣っていると知った。だから、やりたいという気持ちの前に周りの人のことを考えて、遠慮することもあった。

特に印象に残っているのが中学一年生のときの長縄跳びだ。私たちの学校には、体育大会で学年対抗長縄跳びという種目がある。私は、跳ばないことを選択した。跳びたい気持ちはあった。でも、自分が入ることで皆に迷惑をかけることになるのではないかと、自分のせいで記録が伸びなかったら……。そういう申し訳なきが勝ってしまった。実際に練習が始まった。

「せーの。」

というかけ声と共に縄が回り、皆が跳ぶ。最初は数回。そしてどんでん跳べるようになっていった。連続回数が伸びて歓声上がる。その輪の中に自分がないこと、皆で跳ぶ長縄がどれ程楽しいのかも分からないことが辛かった。なぜあの時、「やってみよう」と言えなかったのだろう……。思いを伝えることは、できたはずなのに。遠慮した原因は足にあっても、言わなかったのは自分自身の気持ちが原因だ。にも関わらず、私は伝えられなかった気持ちを全て足のせいにしてしまった。そして、もっと足が嫌いになった。一生付き合っていく足なのに、どんでん嫌いになっていくことが、苦しかった。

それ以来、自分の足について考えることが増えた。良いことは一つもなかったのだろうか、ふと思った。そして足が悪かったからこそ、見えたものがあると気づいた。それは、できない人の気持ちだ。できないことがどれほど悔しくて、できない時にどれほどできるようになりたいと願っているのかということが分かるようになった。また、できるようになる難しさを知っているからこそ、目標に向かってひたむきに努力する人を心から応援できるようになったとも思う。さらに簡単にはめげない強い心をもつことができた。私にはできないことがたくさんある。上達も周りの人より遅い。でも、できるようになろうと目指していく中で、諦めないことを大切にするようになった。目標を達成するために、努力できるようになった。それは、この足だから得られた心の強さだと思う。

自分の生まれもった運命は変えられない。小さい頃は、寝て起きて、足が良くなっていたらどんなに良いだろうと思っていた。でも、それは不可能だ。だから少しずつ自分の運命を受け入れていかなければいけない。私はこの足と共に一生生きていく。自分の足を、前向きにとらえていきたいと思う。足はずっと自分にとってマイナスの影響しか与えていないと思ってきた。でも、自分の足を様々な面から見つめたことによって、プラスの面もあるのだと知った。生まれもったものには必ず意味がある。本当の意味を見つけだせるかどうかなのだ。それは私に限ったことではないと思う。皆さんにも「もっとこうだったら」と思ってしまう部分があるかもしれない。でもそれを含めて「自分」なのだ。私は自分を好きでいるために、足も好きでありたい。そして、良い面、悪い面どちらも受け入れた上で好きと言えるようになりたい。

審査委員会委員長賞

思いやりは言葉を超える

愛知県 豊田市立井郷中学校 3年 富田 真亜玖

「私、ストレスになってるダヨ。」

母は、片言の日本語でぶつくさ言う。

僕は、日本人の父と、フィリピン人の母の間に生まれました。母は、日本語があまりうまく話せません。使いこなせる言葉は、タガログ語と英語です。父は、日本に住む以上、僕が言葉で困らないように、家では日本語で接するようにしていました。母も忙しい中、勉強をしてはいますが、そう簡単に身につくものではありません。そのせいで、幼い頃の僕は、片言の日本語しか話せず、幼稚園では、トラブルがよく起こりました。

それを心配した母は、息子に十分な日本語を与えてやれない分、代わりに英語を教えようとしてくれました。でも、小学校で片言から自然と卒業していった僕は、生活の中で英語の必要性を感じることはなく、母の英語のレッスンを怠けるようになりました。母との会話も日本語で行い、不自由はないと僕の中では思っていたのです。

ところが、中学校に入ってから、母との衝突が増えました。母が片言の日本語で話をしてくると、イライラして、咄嗟に「はあ?」と言ってしまうようになったのです。母が心配そうに聞いてきても、相談したところで、すっきりした言葉は返ってこないだろうと、

「もう、関係ないでしょ。ほっといてくれ。」

ときつい口調になります。そんな時に限って、

「なんで怒ってるノ?」

と、母も食いついてくるのです。おそらくどの家庭でも起こる反抗期ならではの親子喧嘩です。でも、我が家は違います。言葉の行き違いで、大きな揉め事に発展してしまうのです。おかしなボケに対してつっこむだけでも、母は馬鹿にされたと受け取ってしまうし、父や僕が母にアドバイスをしたつもりでも、母は怒られたと感じてしまいます。母の片言の日本語に、僕はうんざりしてしまい、しだいに言葉遣いが悪くなり、母に理解できない言葉で怒鳴ることもありました。いつしか心はすれ違い、埋められない言葉の壁、心の壁が、僕と母の間に立ちふさがりました。そして、「私、日本人じゃないダヨ」という言葉が、母の口癖になったのです。

中学二年生の自然教室で、母から手紙をもらいました。僕はそこで初めて、母の思いを知りました。同じ家に住む家族なのに、言葉が通じないという現実。母親としての葛藤、苦悩。僕がフィリピンで会話に苦労するのと同じように、母は毎日それに苦しめられていたのです。フィリピンの家族は、僕のことを温かく受け入れてくれました。なのに、母にとって一番そばにいて、一番分かってほしい相手である僕は、母を拒否していたのです。そのことに気づいた時、申し訳なさに涙がこみ上げました。そして、がむしゃらに母への思いを手紙に綴りました。英語やタガログ語も混ぜながら、漢字にはふりがなをつけて…。母を思いやる気持ちと、今までの感謝の気持ちを、僕にできる精一杯の形で表したかったのです。

手紙を読んだ母は、強くハグをしてくれました。今では、母と僕で、英語と日本語の交換をし、互いに得をしています。

言葉は、ただ単に通じればよいのではなく、思いを伝えよう、思いを汲もうとする気持ちがなければ、同じ言語を話せたとしても分かり合えません。現に母は、日本語が堪能ではないにも関わらず、たくさんの友達に囲まれ、明るく生活しています。それは、日本人、外国人などの区別なく、心優しく受け入れてくれる人たちがいるからでしょう。

僕は将来、人と人をつなぐために、言葉の壁を壊せる人になりたいです。国際化社会が進み、僕のように、母国語の習得に悩む子どもも増えてくるでしょう。それに、違う文化をもつ人が生活することは、苦勞も多いはずですが、そういった人たちを支える活動や仕事ができるように、少しでも語学力をつけ、いろいろな人と接し、自分を磨いていきたいです。

第40回少年の主張全国大会開催要綱

～わたしの主張2018～

1. 趣 旨 少年高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していきける、健やかな成長が求められています。
そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらおう力などを身に付けることが大切です。
少年の主張全国大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。
2. 開催日時 平成30年11月11日(日) 13時～16時
3. 開催場所 国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟大ホール
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3番1号
4. 対 象 日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。
なお、作品は未発表、自作のものに限ります。
5. 主 催 国立青少年教育振興機構
6. 協 力 都道府県、青少年育成都道府県民会議、全日本中学校長会
日本私立中学高等学校連合会、公益法人日本PTA全国協議会
7. 後 援 内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会
一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会
社会福祉法人全国社会福祉協議会
8. 主張発表者(出場者)・発表内容
 - (1) 主張発表者 各都道府県より推薦された地方大会(都道府県大会)優秀者1名、計47名の中からブロック代表として選ばれた12名が主張発表を行います。
 - (2) ブロック代表定数 全国を5ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。
○北海道・東北ブロック…2名 ○関東・甲信越静ブロック…3名
○中部・近畿ブロック…3名 ○中国・四国ブロック…2名 ○九州ブロック…2名
 - (3) 発表内容 ア 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
イ 家庭、学校生活、社会(地域活動)及び身の回りや友達との関わりなど。
ウ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。
上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。
 - (4) 発表時間 5分程度(400字詰原稿用紙4枚程度)
9. 表 彰
 - (1) 全国大会出場者全員(12名)に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員(35名)に同理事長より努力賞を贈ります。
 - (2) 全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。
 - (3) 全国大会出場者全員(12名)に記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。